

## 欧州王室との比較で見た皇位継承

2019年11月9日 君塚直隆（関東学院大学教授）

### はじめに

\*日本の皇室は「世界的にも稀に見る」「比類なき存在」なのか？

- ・20世紀の二度の世界大戦で敗北した国の名で唯一「君主制」が残った国  
→戦後のGHQ、政府指導部などがイギリス型の立憲君主制を模範に変革へ
- ・21世紀の現在、世界に存続する君主制国家は28に（英連邦王国含めると43カ国）  
→君主制が民主政治（デモクラシー）と両立し、人類に共通の最先進の課題（地球環境、多文化共生、LGBT、女性・子どもの人権擁護など）を牽引しているケースが多いヨーロッパの王室は、いまだに日本の皇室にも示唆与えているか？

### ①「生前退位」の系譜

\*2016年8月8日の「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」（写真①）

- ・現代世界における「譲位（abdication）」の系譜  
→オランダにおける三代の女王（Wilhelmina, Juliana, Beatrix）：いずれも君主自身の高齢化と後事を託せる後継者の存在があつての世代交代  
→ルクセンブルクにおける二代の大公（Charlotte, Jean）：理由はオランダと同じ  
→ベルギーでは Albert II が 2013年7月に譲位：理由は両国と同じ（固有の政治も）  
→イギリスと北欧には「譲位」の慣例は今のところはない
- ・「おことば」表明のありかた  
→2013年1月のオランダの Beatrix 女王のケースを参考に？（写真②）  
→1953年（明仁天皇訪欧時）以来の友人たちとは様々な経験も共有

### ②「絶対的長子相続制」の普及

\*現在の皇室の喫緊の課題は「継承者の確保」「皇族の確保」か？

- ・「男系男子」のみの継承にこだわる危うさ  
→「男系男子」を維持しなければ「皇室」の意味は失われるのか？  
→「男系男子」にこだわったヨーロッパ御三家の末路（17～18世紀）
- ・ヨーロッパでは「男女同権」の考え方もあるが、20世紀末から変化  
→スウェーデン（1979年）、オランダ（83年）、ノルウェー（90年）、ベルギー（91年）、デンマーク（2009年）、ルクセンブルク（11年）、イギリス（13年）が、次々と「性別に関わらず第一子が継承で優先」へ

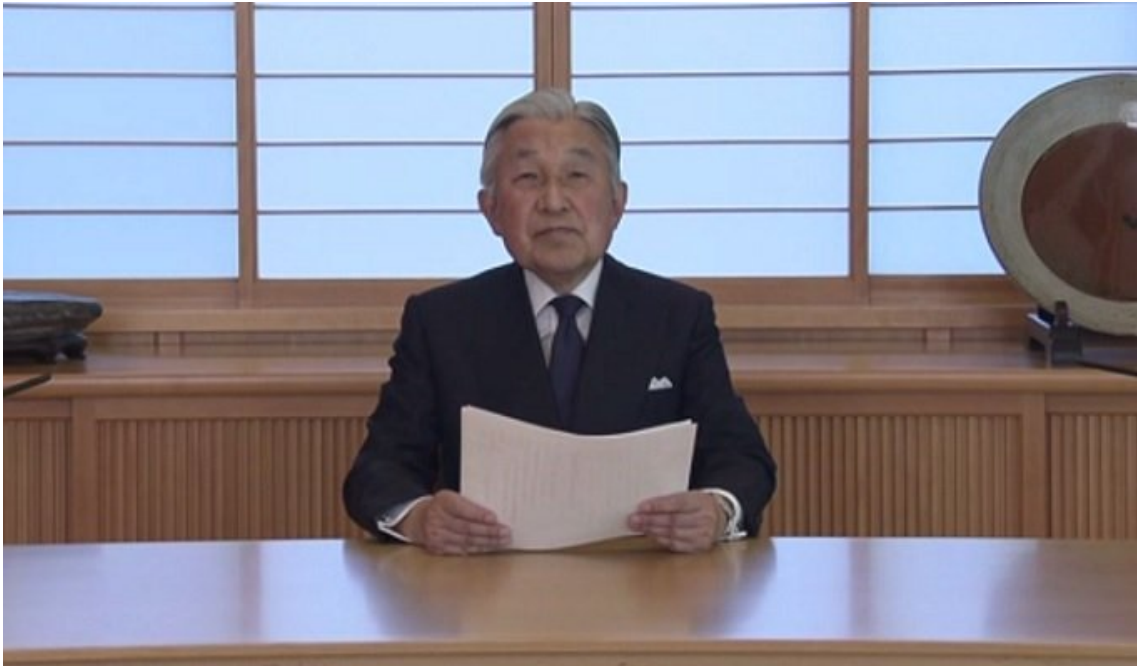
\*あと30年ほどでヨーロッパの多くの国に「女王」が君臨へ

### [参考文献]

君塚直隆『立憲君主制の現在—日本人は「象徴天皇」を維持できるか』（新潮選書、2018年）。

## 参 考 写 真

① 「おことば」を述べられる明仁天皇（2016年8月）



（宮内庁ホームページより）

② 「退位の意向」を明らかにしたベアトリクス女王（2013年1月）



（オランダ王室ホームページより）